

莊

市中三十六丁にて、三千八百餘軒の地なり、町のもやふ皆々杉板の家根にて、上に石をかすく
ならべておしとなし、壁も板壁にして、ひさしは同じやふに一間餘も差出して、是を雪道と稱し
て、雪のふる節の通ひ路とす、往來筋には富饒に見ゆる家居もなく、かしこ爰に草ぶきの小家交
わりて、上方筋の城下と違ひて見苦し、

〔吾妻鏡〕十文治六年元久正月六日辛酉奥州故泰衡郎從大河次郎兼任以下、去年窮冬以來、企叛
逆、或號伊豫守義經、出於出羽國海邊庄略下

〔羽前東根龍興寺鐘銘〕羽州中央、小田島庄、東根境致、白津之郷、山號佛日寺、號普光鑄鐘六月、林鍾時
當借爐炎熱、通冶風涼、一樓鯨骨、万斛銅湯、大解脫器、吸空肛腸、圓滿覺口、吐寺外方、天曉告報、地久天
長、日暮扣發、檀信吉祥、

正平十一年丙申六月廿四日

大檀那前備前守從五位上平朝臣長義願主比丘紹口 住持比丘閑雲叟希字
大工左衛門大夫景弘

〔奥の細路〕南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊る、小黑崎美豆の小島を過ぎて、鳴子の湯より
尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす略○中あるじのいふ、是より出羽の國に、大山をへだ
て、路さだかならざれば、道えるべの人をたのみて越ゆべきよしを申す、○中あるじの言ふに
たがはず、高山森々として一鳥の聲を聞かず、木の下茂りあひて、夜行くが如し、雲端に土降る、こ
ちちして、篠の中踏みわけ、水を涉り石に蹶き、肌につめたき汗を流して最上の莊に出づ、

〔出羽國風土略記〕田川郡大泉庄。

按ずるに、田川郡のうちには有、今其分内詳ならず、庄内といふは、大泉庄内といへるの略稱也、○中
信正は、義經記二にも大泉庄と有、飽海田河兩郡を言にや、又田河郡のみを言にや、右書の起を考
ふれば、田河郡計を大泉といふにや云々、